
午後とアイスと傍の君

バームクーヘン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

午後とアイスと傍の君

【Nコード】

N9378U

【作者名】

バームクーヘン

【あらすじ】

映司とぬえのちょっとしたなんてこと無い話。

息抜きにどうぞ。

(前書き)

ちょっと書いてみました。

東方とライダーのコラボなので、苦手な方はご注意ください。

これはある日のこと。

正午を過ぎ、まばゆいばかりの光を太陽は放ち、暖かいというより暑いといえる気温だった。

そんな中、ここ、命蓮寺の縁側に一人の青年が座っていた。

火野映司。

仮面ライダーオーズとしてヤミーやグリードと戦った男である。

今はこの命蓮寺に身を寄せている。

手元には水があり、此処でのんびりとしていたようだ。

手元のコップを手に取り、一口水を飲んだ時に頬に何か冷たい物が当たる。

「うわわっ!」

コップの水を零しそうになるが何とか耐え切り、コップをお盆に置いた。

そして、冷たい物を押し当てた人物を特定するために振り返る。

映司が振り向いた瞬間、顔面にアイスが押し付けられる。

映司はアイスを受け取ると、それを押し付けてきた人物を見た。

「何だ、ぬえちゃんか」

「だーからあ、ちゃん付けは止めてって」

黒い髪の少女、封獣ぬえは映司の隣に腰掛けた。

そして、二人でアイスを食べ始める。

二人の食べているアイスは全く同じ物であり、どうやら半分に割って食べるアイスのようだ。

「でもこのアイスどうしたの？」

「アंकの勝手に取って来た」

ぬえの発言に、映司は慌てた。

「じゃあ、早く食べてばれないようにしないと！」

そう言ってみしゃむしゃとアイスを食べるが、急ぎすぎた為か頭がキーンとした。

見兼ねてぬえが映司の正面に近付く。

「あーもう。慌てるから」

ぬえは自分の手の平を映司の額に当てる。

「どう？少しは温まった？」

「・・・うん。ありがとう」

大分痛みも引き、映司の表情も柔らかくなった。

映司はぬえに礼を言ったが、暫く経ってもぬえは動こうとしない。

どうしたのかと、映司はぬえに尋ねた。

すると、ぬえは口を開いた。

「もうちょっと・・・このままで良い？」

ぬえは映司から目を逸らした。

顔がほんのり赤いのはこの暑さからか、別の理由があるのか。

映司は水の残ったコップを手に取り、ぬえの頬に押し付けた。

「お返し。あと、いいよ」

映司はそう言って、フツと微笑んだ。

ぬえは頬に押し付けられたコップを映司の手ごと左手で包み込んだ。

その状態は、暫く続いた。

ただ穏やかに、二人の午後は過ぎて行った。

(後書き)

アング「何やってんだアイツ等」
雛「二人とも仲いいのねー」

そんなにイチャイチャしてない・・・はず。

オーズといえぬえ。これは譲れない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9378u/>

午後とアイスと傍の君

2011年9月9日02時18分発行